
Twin Genesis Online

野衣本フーコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Twin Genesis Online

【Zコード】

N7157Y

【作者名】

野衣本フーコ

【あらすじ】

Twin Genesis Online VRMMORPG

Gの革命児。他の追随を許さない圧倒的なスペックを以て世界最高のゲームとなる…筈だった。

そう、ゲームの支配者たるAI『ペンドント』の暴走が起きたまでは。

11/21 諸事情により、こちからで掲載させて戴く事になりました。

?

これは 僕の戦いの記録。

この記録をつけ始めてから何日が経ったか…。
よく覚えていない。

思い返せば色々な事があった。

初日から冤罪で牢獄にされるわ、友人にも置いてかれるわ、またまた牢獄送りになりそうになるわ、それから…！

キリがないので止めよう…テンション下がる…、

ゴホン…。

とにかく…明日には全ての決着が着くのだ。
今は万全の状態で挑む事だけを考えよう…！

最後に、もしも、万が一僕が“脱落”したら
いか、俺強いし。

無いこと書いても仕方無いか…ハツハツハ…！

第99層
『エンダスター』より記す

?

「まだか！？もう一時間は経ったぞ…。」

一際大きな盾を携えた大男の声が戦場を駆ける爆音を越えて届いた。

「『ベヒモス』のHP残量は！？」「一割弱です…。」「^{ヒール}回復まだか！？クソッ…！」

飛び交う怒号や指示がここからだとよく聞こえる。

うとうん、中々良い眺めのう（笑）

ん？ルイスのヤツ今『臆病者』呼ばわりしやがつた…！バリーもガ

ツンと言つてやれよ…！『アイツはそんな男じゃない…！』って…！

「『ベヒモス』のHP残量一割切りました…。」

おっと、出番みたいだ。

我らがリーダー、“白帝”ミカドが右手を挙げたのを合図に俺は動き出した。

第99層のボスモンスター『ベヒモス』の弱点であるその背後へと向かつて走る。

え？気付かれたらどうするつて？

愚問だな、ホント。

俺、今は透明人間だからバレないの（笑）
ほらな、背後に立つても気付かれな
「おっ！アブねーな才
イツー！」

見えてんじやねーのコイツ…？

「早くしら姫様紳士…！」「壁タングの氣持ち者えりや…」「へマした
らヤバしてやるからな…？」

その殺氣、ベヒモスに向けろよ。
遊びが過ぎたのは認めるけどさ…。

さて、それじゃあサクッと倒しますか。

30分後。

それはもう鮮やかに背後から一発連撃技をクリティカルヒットをせ
てボス撃破！！

で、意氣揚々と仲間のもとに戻ったわけですよ、そしたら…

『わい、アイテム全部出してしまひおいつか…？』『それじゃあ誰がメ
イトを殺るかジャンケンなー？』

皆さん、目が本気です。本気と書いてマジと読みます。

「何でだよー!?俺、役目は果たしたぞー!?!」

抗議、猛抗議、命の危機で黙つてられるか!!!

「テメエ…遊んでたる…?」

ヤクザみたいな口調のこの娘はレイナ。
全身白のフリフリドレスみたいな格好のロリ顔少女は今日“も”ど
す黒いオーラを俺に“だけ”向けている。

要するにツンデレなんです。
デレた事無いけどね

「ハツハツハ、モテる男はツラいな」（笑）

「お前ら下がつてろ、巻き添え食うからな。」

そう言って取り出したのはこれまた真っ白なバズーカ

「…………って、待った!!バズーカって対人用じゃないと思つんだ
ケドー!?」

「それぐらい知つてゐつゝの、だからテメエ以外に向けたりしねえ
よ。」

俺つて人として認知されてなかつたの!?

「はじめ」

「いやあああああああツーーー！」

これが、攻略組ギルド『白龍』の日常である。

VRMMORPG “TwIn GeNeSiS OnLiNe”。

実装版解禁日にログアウト不可となつたこのゲームは、製作者の陰謀では無くこのゲームのGM^{技配}たるAI“ペンドント”的暴走によるものらしい。

唯一の脱出方法はゲームクリア、つまり100層のボスを倒す事らしい。

ここまでありがちな話だな、漫画やライトノベルでもよくある鉄板ネタだ。

あとはプレイヤーが手と手を取り合って仲良く協力してめでたくクリア。

なら、どれほど良かつた事か……。

『このゲームでは全員が戻る事は不可能です。』

それが、支配者からの最後の言葉。

と言つても、俺は聞いたわけじゃない。

その言葉を直に聞いたのは当時のトッププレイヤーのみだ。

『“白”と“黒”、“魔王”的命を絶つた陣営にのみ『えられる権利なのです。どちらかを“犠牲”にする事で、現実へと戻る事が出来るのです。』

この世界のプレイヤーは一分されてこういふわけだ。

互いが助かりたいと思つほどに溝が深まっていく、悪魔のシステム。

皆、恐れていののだ。

明日、ゲームがクリアされて、自分が消えてしまう事を。
だからああやつて気丈に振る舞つて、不安から逃れようとする。

“ただの”デスゲームなら、こんな思いも無いだろう。

もしかすると、ペントンはとても人間的な機械^{A_I}なのかもしない。

ふと思い至つた時、アラームが鳴つた。

午前0時を告げる音が部屋に鳴り響く。

ベットから体を起こすとアイテム欄から一冊の本とペンを取り出す。
ギルドの連中には内緒にしてある。

あいつらに見られたらと思うと顔から火が出そうだ…。

日記なんてそんなモンだよな？

誰かに見せるわけじゃないけど書く、強いて言つなら自分に見せるため、みたいなモンだよな？

本を開く。

1ページ田には『“第10層 《ウォーラ》よつ”』とだけ記されてる。

いつも、ここで全財産の半分も使って買ったんだっけ。

その後も色々と書かれていた。

愚痴や喜び、痛み…。まるで昨日の事のように思い出せる。

最後の1ページ、白紙のページ。

「 第99層 『エンダスタート』 」

これで、おしまいだな。

そうだ、“約束”。忘れるところだつたな。

『たとえ今日死ぬとしても、命尽きる前の瞬間までは全力で生きる。諦めた者に奇跡は訪れぬ。』

この本の持ち主との約束だ。

「奇跡か…。」

皆が笑つて終えられるハッピーハンド

奇跡があるところのなら、まさしくそれだらけ。

そんなものは無い。

解つてはいる。理解もしてはいる。けど、

「信じるのは自由だよな」

独りじめて、眠りについた。

?

俺は今ゲームの中にいる。
VRMMORPGってヤツだ。名前くらい聞いたことがあるだろ？

で、そのテの話には付き物の『ログアウト不可状態』だ。笑えねえ
な、ハハツ。

ん？なんでゲームに閉じ込められるのに悠長に構えてられ
るのか……か。

簡単な事だ。

俺は脱出不可能なゲームの中で、囚われの身、だからだ。

「ウオオオオオオッ！――！」

走る。風を切るように走る。

「早くしないとおおおおおお――！」

俺の横で、同じく全力で走っているのは親友の姿。入念にセシトさ
れていたであるうしんしん頭がグチャグチャになっている。しかし
今はそんな事はどうだって良い。

「おい、貴史……今何時だ！？」

腕時計をチラツと見る貴史。

「あと五分！…ギリギリだ…！」

「チクショウ…急ぐぞ…！」

「わかつてらあ…！」

道を全力で駆け抜ける高校生の姿はさぞや恐ろしいものだろう。しかし、一つだけ断つておこう。

俺達はマトモだ。

いや、少々中毒気味のゲーマーである事は認めるが、何も気が触れた故の奇行ではない。

今日はVRMMORPG、“TwIn GEnesis OnlinE”の実装版解禁日であり、版から“TGO”をプレイしている俺達としては何としてもスタートダッシュを決めるたい。一秒でも早く家に帰りたいのだ。

考えてみて欲しい。

クリスマスの夜、プレゼントが待ち遠しくてなかなか寝付けない時あの高揚感。それに似た感情が昼休み辺りから胸を占めて、家に帰りたい衝動を自制心総動員でなんとか押さえ込んでいたのだ。反動でこんな風になつても仕方無いのか？いや、仕方無い筈だ！！

ここから家まで約三分。部屋着に着替えるのに一分。間に合つか…

シャージ

！？

そこから俺は一切の思考を止め、力の限り走った。

「ただいまッ！…」

母の『おかえり～。』という呑気な返事を待たずに玄関横の階段を一段飛ばしで駆け上がる。

「あと一分しかねえ！…？」

ドアを開けると時計が田に飛び込んだ。タイムコントローラーまで時間は殆どない。

こうなる事を予測していた俺は予め用意しておいたジャージに着替えると、同じく待機状態でセットしておいたVR用機器“アナザー”を慣れた手つきで装着する。

制服が脱ぎ放しだが、この構つてはいられない。

起動スイッチをONになると、突然睡魔に襲われ、意識が途切れた

気が付くとそこは闇の中だった。

『バグか！？おいおいマジかよ…。』と溜め息をつこうとしたその時、いつの間に現れたのか、田の前でピエロがこちらをじっと見て

いふのに気が付いた。

しかも光ってるよな、この人…。

真つ暗な中、電球のよう元気光り輝く姿は不気味をより一層引き立てている。

実装開始記念のイベント…なのか?

若干腑に落ちないまま、一言も発しようとしないペロロが口を開いた。また感じで問い合わせる。

「あのお…?」

すると、まるで彼の意を汲んだかのようにペロロが口を開いた。

「一ツ、選べナ、」

いつの間に取り出したのか、両手に小さな立方体の箱を乗せてこちらに差し出している。

「黒と白の箱…。」

やはりイベントの類だつたようだ。ホッと胸を撫で下すと同時に田の前の二つの箱を睨む。

「ううう…ッ!!

田を見開いてよく観察する。が、何も見えてこない。当たり前だが。

悩み処だな…。

貴史には悪いが、しばらく待つともう少し事にならう。いや、アイツも今頃は箱と睨めっこの真っ最中か。

俺は、もう一度それらをよく見るためにペHロに向かって一步踏み出す。と、

コツ…。

何か硬いモノが右足の爪先に当たった。

「？」

何も無いよつだが…？

もう一度右足をシンシンと前に出す。

コツコツ、

やつぱり何かある。

しゃがみこんで足のあつた位置を手を凝らして探す。はたして 何も無いよつに見えた足元には、暗闇に同化していった“3つ田の箱”があつた。

透明な箱、硝子に似た硬質な素材でできているようだ。

「これでもいいですか？」

拾い上げたそれを振つて見せる。

「本当に、良インダネ？」

3つを見比べる。元から差し出されていた2つと下に転がっていた透明な箱。

勿論、生粋のゲーマーの彼がどの選択をするかなんて決まっている。

「ええ。」

「ソウカイ…マ、頑張リナ。」

辺りが眩い光に包まれていく中、ピヒロがニヤリと笑った、ようにな見えた。

気が付くとそこは野原だった。

辺りを見渡すと、他にも寝起きのように突っ立つたままのプレイヤーが数名。

どうやら無事に始まつたらしい。

視線を落とすと服装もジャージからボロい服
初期装備になつていて、
版の時と同じ

もう一つ気になるのは外見だが、よく考えてみると、確認の必要性が無い事に気付いた。

TGOではよりリアリティを追求するため、ゲーム開始前にプレイヤーの、顔も含めた身体情報を予めVR機器のハードの方へ入力している。それを採用している。

そこまで確認したところでまたしても視界が暗転した。しかし今回は、版で経験済みのチュートリアルが開始したのだと解っていたため先程のように驚いたりはしない。

田の前で丁寧に解説されている既知の情報をスキップで飛ばし読みする。

この辺に性格が表れると言うが本当らしい。熱心に聞いているプレイヤーとスキップを連打するプレイヤーの2つに別れている。と言つても後者の数は圧倒的に少なかつた。

「おっ、貴史いるじゃん。」

少し離れた位置で予想通りチュートリアルを受けていた。

昔から説明書を読み込んでからゲームに取りかかるアソイツの性格のせいで何度もケンカになつた事さえあつた。

と言つても、もう何年も昔の話だ。俺だつていつまでもガキのままじゃない。とりあえずチュートリアルが終わるまでの間、システムウインドウを開いてステータスやら初期アイテムやらを確認して待つことにした。

まあ、確認と言つても初期ステータス位しか見るものないんだけどね。ほら、アイテム欄はこの通り空なん?

何かが右隅にひつそりと収納されている。サイコロ状の透明な箱さつき貰つたアレだ。

調べてみるか。

しかし、ちょうどチュートリアルを終えた貴史の呼ぶ声に遮られる形となつた。

なに、調べるのは後回しでも問題無い。それより今はMoba狩りが最優先事項だ。今日中に Lv5まで上げておきたい。

話し合いの結果、プレイヤーで飽和状態の草原を離れて少し難易度の高い森の方へ場所を移す事にした。

「それじゃあ俺がM○bのタゲ^{田標}とるからメイトは背後に回つて攻撃してくれ。」

「了解、バリー。」

バリーは貴史、そしてメイトは俺のTGO内でのネームだ。バリーは昔いたスゲー野球選手から採ったものらしく、オンラインゲームではときどきこの名を用いている。

俺の方は“ナイトに成りきれない”というブラックジヨーク的なものだ。何となくしつくり来たため使っているだけで深い意味や拘りは無い。

おっと、^{コボルト}早速のお出ましだ。

すぐさまタゲをとったバリーが俺と向かい合つように移動、ちょうど敵がこちらに背を向ける形となる。

『いいか、L▼1の俺達がL▼4のM○bと真つ正面から勝負を仕掛けば苦戦を強いられるだろつ？だから殆どのプレイヤーはしばらく手を出さないはずだ。』

数分前に聞いた言葉を思い出す。

『そこでだ、真正面からじやなくて背後から狙えれば良い。』

コボルトの背を短剣で一閃。

甲高い悲鳴を上げてこじちらを睨む。作戦通りだ。

その隙に距離を詰めていたバリーがコボルトに斬りかかる。
一撃、二撃、三撃と放たれた攻撃はコボルトのＨＰを全て奪い去った。

無数のポリゴンとなつて消えたのを確認して二人はハイタッチを交わした。

狩りを始めてから三時間。リアルタイムで進行しているTGO内も現実同様日没寸前となっていた。

他のプレイヤーを見かけたのはつい30分程前の出来事で、それまではまさに独占状態だったため、予想以上の成果を上げることが出来た。

「今日はこんなモンだな。」

Lv8になつたバリーが、レベルアップを知らせるファンファーレの鳴る中、満足気に頷いた。

「そうだな、それじゃあ街でドロップ品の換金でもして落ちるか。」

「ついでに武器も見ようぜ?」

「だな、さすがに短剣一本じゃな。」

「このみすぼらじい服もなんとかしたいし。これじゃまるでゴジキだ。」

ワハハハと笑いながら街を目指す俺達。

そう、その時俺達はまだ知らなかつたのだ。これから起る出来事を、自分達の運命を。

『現在』

メイト L V 8

バリー L V 8

?

「結構人いるな。」

日はすっかり落ち、辺りも暗くなっているにもかかわらず街はプレイヤーで賑わっていた。

フィールドへと繋がる街の大通りは人々の活気で満ちており、テスト時はほぼ皆無だった生産職の職人プレイヤーの姿もチラホラと見受けられる。

あ、あの食材見た事ないな。実装版の新アイテムかな？おつ！…あの斧カッケー！！値段は……って三万！？あの職人正氣か！？

「メイト、余所見してるとぶつか

」

ドンッ

「きやつ…！」「おつと、

『すみません』と叫う直前、けたたましいアラーム音が街に響き渡る。

「え、何、WARNING警告？？？」

突然目の前に表示された赤色の警告文に目を白黒させる。

警告文は重大なマナー違反などを犯した時に現れる。

故意にならともかく、両者不注意でのアクシデント、それもぶつかつただけで表示されるなんてまず有り得ない事だ。

因みに、TGO内における違反行為の処罰は全てこのゲームのGMであるA.I.^{ペンドント}の裁量で決まる。例外として他プレイヤーへの違反行為を行つた場合は処罰の有無のみ被害者であるプレイヤーに決定権が託される。

流石にこの騒ぎで周囲も気付いたらしい。野次馬が集まり始める。

免罪なのだから別に気にする必要は無いのだが。

ほら、彼女だつてニッコリ微笑みかけて

“通報”ボタンを押した。

「ちょっ！？」

『なんで！？』と詰め寄る前に景色が薄くなつて行く
“強制転送”だ。

視界が完全にホワイトアウトする瞬間、俺は見た。
信じられないといった表情を浮かべたバリーが憤然として彼女に詰め寄つたのを。

呆然としたまま俺を見る彼女を。それはまるで重大なミスでも犯したかのような目だった。

「参ったな…。」

ここは牢獄の中。

迷惑行為を働くような集団のためのものであるのだが、実装版開始からものの数時間で十名弱が御用となつていた。

俺もその中の一人だが。

まさか自分がイエロー（マナー違反者のプレイヤー名の色が一定時間黄色に変色する事からそう呼ばれる。）になるとは……。
確かに、プレイヤー間のトラブルは一律一週間の投獄ペナルティが課せられる。

『快適にプレイしていただくために』といふ企業側の配慮が今は憎い。

唯一、冤罪を晴らせば从此からおさらば出来るわけだが、冤罪を証明するには少々厄介で、先程ぶつかった女性の力が必要だ。

更に言うとこの牢獄、M〇bが出現するフィールドの中に存在する。流石に檻の中にまでは入って来ないため急ぐ必要は無いが、彼らがここにたどり着くには最低でも一度はM〇bとエンカウントする事になるはずだ。この周辺にはLV5以上のM〇bがウヨウヨいるためたどり着くのは困難だ。

特に夜は攻撃的なモンスターが多く、LV10にも満たないプレイヤーがたどり着ける筈がない。

スタートダッシュを切った自分でさえLV8の今、LV10を超えるプレイヤーが果たして何人居ることやら……。

居るならば、そいつは間違いなく現時点でのトッププレイヤーの一人だ。

「バリー、頼んだぞ……。」

唯一の頼みの綱である友人を名を呟くと、ウインドウを開いた。時刻は20時を過ぎている。予定時間を完全にオーバーしていた。きっと今頃は夕飯を食べに来ない息子を心配した母親が二階に上がって来ている事だろう。

早く戻らないと『夕飯抜き……』なんて事も……。

『でも、^{貴重}バリーとの話』夢中で手元に手をつけてないってのこ…ッ!!

バリーには悪いが先に落ちよつ。どうせ何も出来ないわけだし。

俺は《フレンドリスト》の一番上に表示されてる《バリー》の文字をタッチすると『今日は先に落ちる、スマン…!』と書いたメールを送った。

さて、落ちるか。

ウイングの左端下、《ログアウト》の部分をタッチしようと

「あれ?」

『ログアウト』ボタンが無い。

「あの…」

「あん? 何だ、兄ちゃん、改造データなら売れねえぞ? GMにそのテのモンは押収されちまつたからな」

「いや、そんなんじゃ無くてですね、確認したい事がありまして。」

「確認だあー？」

面倒くさいといった様子で顔を顰める。その表情が強面の彼の顔をより一層恐ろしいものにしている。

リアルなら関わり合いになりたくないタイプのプレイヤーだが、緊急事態だと割り切って会話を続ける。

「ウインドウのログアウト部分を見てもうえませんか？」

「ウインドウだあ？ 何なんだよ……たくよお。」

渋々、といった感じでウインドウを開いた。（他プレイヤーのウインドウは見えない仕様なのだが、手を宙にかざすとこうウインドウを開く時の動作から解つた。）

しかし、視線が左に動いた瞬間、表情が一変した。

「ログアウトボタンが……消えてやがる……ひーっビリヒリ事だ！？」

バツと二切れを睨み付ける男に応える代わり、天を仰いだ。

マジかよ…ッ…！

『すぐにでもGMにメールを』と、抗議のメールをうち始めた時だつた。

“それ”が漆黒に染まつた夜空に現れたのは。

「何だよアレ……？」

空より深い闇を纏つたそれは圧倒的な存在感で、暴力的とさえ呼べるものだった。

卷之三

その存在に、呑まれていた彼を呼び戻したのは硬質な機械音。

『グランドクエストを受注しました。』
メッセージ欄の文字に誘導されるように《クエスト一覧》を開くと
確かに受注されている。

~~~~~

～グランドクエスト～

十の国の十の層、全ての門を開きし時、真の門は開かれる。

ゆめゆめ忘れる事勿れ。

行く手を阻むは一人の門番、避けては通れぬ定めなり。  
ゆめゆめ忘れる事勿れ。

命絶たれしその時に、魂は皆囚われる。

真の門が開きしその時に、全ての魂は解き放たれん。

（大予言者カツサンドラ最後の予言）

{ } { } { } { } { } { } { } { }

なるほど、

「具体的な指示：なくね？」

ていうか解り辛いな、オイ！！

「英雄…つてのは俺達の事か？門…はアレだから、門番はボスモンスターか。」

時の記憶を辿つて推理を始める。

「十の国、十の國はそのまゝの意味として……眞の町つゝのは……？」

まだ層があるってのか？厄介な。

「兄ちゃん、バカか？」

先程の柄の悪いオッサンが絡んできた。

「真の門つてのはだ、」このゲーム自体、つづらつた。

「オッサン……天才なのか！？」

人は見かけによらないこと言つが、本当だな！…

「ハツハツハ！…ちょっと考えりや誰にでも解るか、んな事。」

口ではそう言つてゐるが、先程までの仏頂面が満面の笑みになつて  
いる辺り、どうやらまんざらでも無いようだ。

すっかり機嫌を良くしたオッサン（ダンパと名乗つた。プレイヤー  
名は表示されているから既に解つていたが。）は残りの解説もして  
くれた。

「この“魂は囚われる”ってどこの、こいじだ。これは“死んだらゲ  
ーム終了まで復活出来ねえ”って意味だ。ま、死ぬよりはマシだろ  
うがな。」

「へえ… てつきつけスゲームってやつかとばっかり…。」

「あ～、一応テスゲームではあるな。」

「どうこう事？？」

「いいか？“魂が開放される”のはいつだ？」

「ゲームクリアした時。」

「じゃあ、もしもだ。」

「？」

「全員が死んで、捕らわれの身になつちまつたり… どうなるよ？」

「そりゃあ……。」

「誰も復活出来ないから……つー?」

「一生閉じ込められたままー!?」

「そうなるな、」

「デスゲーム…。」

漫画やライトノベルで何度も読んだのを思い出した。  
主人公が活躍する様子を羨望の目で見ていた事も。

これはチャンスかもしれない。

俺が、皆を救う。英雄になるチャンスかもしれない。しかし…。

「一週間のペナルティ…。」

このままでは、かなりの差をつけられる事になるだろう。  
いくら テスターとは言つてもすぐには追い付けないだろう。

それに情報だ。

なんと言つても情報は武器になる。

しかし、殆どの行動を制限されている牢獄内ではプレイヤー間で行われる情報交換のスレッドのアクセス権限が無いため、浦島状態に陥る事は必至だ。

重くのしかかるアドバンテージ。

「……拙くね?」

トップギルドか中堅プレイヤーになるまでどれだけ時間がかかるんだよっ！？

「ま、やるしかねえだろ。」

やるしかない。

「…………そうだよな、やるしかねえよな……よしつ……！」

両頬を叩いて喝を入れる。

「その意氣だぜ、メイド。」

鼻息も荒く意氣込む彼を一ヒルな笑みを浮かべて見ているダンパだつた。

牢獄で過ごす事7日間、晴れて懲役期間を終えて街に転送された俺は、時からの行き付けの、NPC経営の酒場でアクセス権が回復したスレッジを貪るよつに片っ端から見ていた。

まず気になるのは現在の攻略進行度だが、なんと5層まで攻略済みらしい。

時は一週間かけて3層にたどり着くのがやつとだった事を考える  
と脅威的なスピードだ。

そして驚くべきはボスモンスターの攻略人数。

その数、たつたの8名。

次層へと繋ぐ門。その開門者の名を記す石碑が門の横にあつた事がそれを証明しているらしい。

8人での門番達を……？

正直、俄には信じがたい話だ。

デスゲームと化した今、8人でボスに挑む剛胆さにも呆れかえるばかりだが、何よりもその実力はゲームバランスを崩壊せんばかりだ。

「 その8人が仲間割れしてるので見たあ？嘘くぞ…。」

『方向性の違いによる解散』

つて、歌手グループかよッ！

『ギルド分裂か？』

『ギルドリーダーとサブリーダーが新ギルド旗揚げ？』

『知り合いがギルド加入を打診された』など、眉唾モノな書き込みが多数。

一通り目を通した俺は、注文してあつたミルクの残りを一気に飲み干すと代金3ツーカーを払うためウインドウのアイテム欄を開く。

「あ～… そういうや換金まだだつたな。」

アイテム欄に収納されたままのドロップ品を何となく確認していると、

「これは……？」

アイテム欄の左端に表示されたそれは、初日見た透明の箱

で

はなかつた。

「sole ability “ファンタム”」

これが俺の運命を大きく変える事になろうとはなかつた。

俺はまだ知ら

そういうばバリーは？

《現在》

メイト L V 8

?

「何で 『アビリティアイテム』が……？」

アビリティアイテム 『アビリティ』と呼ばれる<sup>スキル</sup>技を修得するのに必要なアイテムの事だ。

基本的に高難易度のクエスト報酬であつたり、ポピュラーな物ならばNPCの経営する店で大金を費やす事で購入出来る物であるそれは、駆け出しの初心者が簡単に手に入れられる代物では無い。

「コストは 30！？」

アビリティにはコストと呼ばれる物が存在する。

コストとは簡単に言えば制限だ。

プレイヤーはレベルに応じたコストを持つており、スキルを修得する際に消費する。

一般的に高コストであるほど性能が良い。

初期で入手できるアビリティのコストは1か2、よくて3といったところだ。

時でもコスト5を超えるアビリティは見付からなかつた。

それがどうだ、目の前にはコスト30のアビリティ。

間違いなく上級アビリティにカテゴリーされるものだ。

初期段階でのプレイヤーの所持コストは20。LV5毎にコストは所持コストが5増えるのでLV10到達時に全コストを払って修得出来る計算だ。

因みにアビリティアイテムは修得するまで効果は解らない上に使いきりであるため、やり直しも出来ない。

『アビリティ修得に必要なのは金ではない。勇気だ。』と言われる最たる所以だ。

「……ま、急ぐ事もないよな？」

かくいう俺もその一人だつたりする。

べ、別に怖じ氣づいたわけじゃねーし！  
慎重さも必要だと思つただけだし！！

とにかく！－まずはバリーと落ち合ひ事が最優先事項だ、うん。  
俺はバリーにその旨を伝えるメールを送る事にした。  
なに、心配性なアイツの事だ。すぐに返信が

返つて来なかつた。三日経つてるんですけど…。

勿論、中堅プレイヤーとして頑張るのは解らんでもない。  
もしかしたら本当に“噂の10人”の誰かがバリーを勧誘していく  
も不思議ではないとも思うし、忙しいとしても責められる事じやないしな。

でも、三日間もメール無視する程の事つて何ですか！？

待ってる間ずっとレベル上げしてたらいつの間にかレベルも1~4になつちゃったし、3層まで上がって来ちゃったし……グスン。

「来るのはダンパさんからの裏情報ばっかだし…。ありがたいけどさ……ん、待てよ?」

ダンパさんにバリーの情報提供してもらえば良くな?

「何で早く気付かなかつたかなあ? これで良し!..!」

さあてと、それじゃあバリーを驚かせる用意でもしますか!..!

#### 第7層 『ネルバイン』

渴れ果てた大地に降り立つた5人のプレイヤー。

風格漂う彼らには共通点は見当たらない。武器、服の色、性格、容姿、どれをとつてみてもカブることはない。

白のロープを羽織っている事以外は。

その後ろを十余名のプレイヤーの列が続いている。彼らの羽織るロープは白一色で染まっている。

「確かに…“脱落者”はいないようですが……。」

「だから言つたじやん、コイツらも戦力になるつてさあ~。」

「ギルメンいないの、後はお前だけだぜ、バリー？まさか、まだ仲間置いて来た事を後悔しているのか？もつ過ぎた事だらう？」

「関係無いですよ……昔とか、今とか。」

「てゆーかもう脱落してんじゃないのあー？バリたんの知り合いでさあー？」

「おー、レイナ！…」

「いえ、良いんです、ジャイロックさん。気にしませんかい、」

「しかしだな、バリー！…」

「とにかく落ち着いてください、らしくないですよ~」

「…………すまない、つい熱くなってしまった。」

頭を下げる。背丈が一メートル近くあるため、目線が同じ高さになれる。

「…………君の友はまだ脱落していないんだな？」

「ええ……そのようです。この前メールが来ました。」

「…………やうか。」

顔上げる。

「大切な、」

ポン、と大きな手を肩に乗せた。

「はい。」

彼の背中を見送ると、背を向けて歩き出す。  
目指すは第3層。

次のボス戦には参加出来ないかも知れないが、彼らなら自分が居なくとも大丈夫だろう。

「さて、メイトのヤツをビックリさせてやるかな　。」

「ダンパさん、それ本当！？」

第3層の街の中心部、露店を開いている強面のプレイヤーに話しかけるメイトの姿を遠巻きに見守る人々。  
本人は『もう馴れちまたよ。』と口では言っているものの、普段よりも虫の居所が悪いようで、どこかトゲトゲしさを感じる。

「だから何度も言わせんな。いいか、バリーってのがお前さんの連れなら、そいつは今トッププレイヤーの中の一人、『白騎士バリー』として絶賛活躍・躍・中だ！』

「バリーが……あの、噂の一人だつて……！」

「にしてもまさか……あの『軌跡』の人と知り合いとはな……。

なあ、良ければ　　「

『軌跡』は今は解散してしまった彼らのギルド名だ。

「情報なら売らないですよ、」

「チエツ……堅いヤツだなあ……。」

「俺のせいだアイツがP.K.にでもあつたらいと困りと……。」

「トッププレイヤーを誰がP.K.出来るんだつづーのは考え無かつたのか?」

「強いつていっても、数には勝てない。だろ?」

「お前さん、バカなのかどうなのかハッキリして欲しことこりだ……。扱いにくいつたらありやしねえぜ……。」

短く嘆息する。

「死なない程度にバカだよ。」

立ち上ると同時に、100ツーカー硬貨を指先で弾いた。  
宙を舞う金をキャッチしようと田で追うダンパに背を向けて歩き出した。

目的地は第4層 『リリナーーバ』、森を通り抜けるのに三時間、今からだとだいたい昼過ぎになるか。

アビリティ  
能力の効果を試すのにもちょうど良い。

親友との再会が、はたまた強力な能力を得た事によるものか、彼は浮かれているようだつた。

第4層 『リリナー・バ』、全ての家屋が藁葺き屋根という街の光景に『どこの昔話だよッ！』と突っ込んだ思い出の（？）土地にバリーが到着したのは午後一時。

約束の時間をピッタリだが、予想していた通り、メイトの姿はない。  
『うせその辺で路草でもくつてゐんだろうな…。』

M・o・bの湧かない安全地帯の原っぱに寝転がつて暢気に待つことにした。

メイトとの対人術その1、『心配しない事。』

一方その頃、当人はといふと…

「昼に ネオM・o・bだと…？」

『ネオモス』 虫型M・o・b 『モス』の強化型だ。LVは17。イモムシに似た外形で正直、気持ち悪い。

斬つても変な液とか出ないだけマシか…。

片手<sup>ダガ</sup>短剣を両手に一本ずつ。“ツインダガー”と呼ばれるスタイルだ。

手数の多さと多彩な技で相手を翻弄する

クリティカルヒットが出やすいのも特徴の一つだ。  
難点は攻撃範囲の狭さ。

そのためか、あまり人気が無いようだ。

『ソロのダガー使い発見www』というスレを見た事がある  
が…酷いもんだったよ、ああ…。

感傷にふけりながらもネオモスの突進を避ける。（突進というより  
転がるに近いが、どうでも良い事だ。）

さて…と、一気にカタをつけるか。

「sole ability 『ファンタム』」

スッと、何かが体を包み込むのを感じ取る。

こちらを振り返ったM○bが、キヨロキヨロと辺りを見回し始めた。

よし、上手くいったな……。

これが、アビリティ『ファンタム』の能力の一つ、“透明化”だ。

『ファンタム』は“隠蔽スキル”と“索敵スキル”をMax値まで  
引き上げる能力で、短剣の弱点である攻撃範囲の狭さを補つて余り  
ある超級スキルだった。

透明化の時間は短いものの、発動制限が無いため問題は無い。何度も透明化すればよいだけの話だ。

水泳でいう息継ぎの回数が多い、といったところか。

ゆっくりと背後から迫る。が、気付いていないようだ。

森の奥へと戻つて行く敵の背中を斬りつける。赤いエフェクト、クリティカルヒットだ。

突然のダメージに混乱したネオモスは、最早メイトの敵では無かつた。

「大遅刻だ……。」

待ち合わせの場所に着いた時には午後4時をまわっていた。

調子に乗つて暴れまわつたのが理由だろうな。おかげでLV18だ

よー！

うん、解つてる。早くバリーの所に行つて土下座しないといけない事くらい…。トッププレイヤーから命狙われるつて、洒落にもなりませんからね、ハイ。

つてなわけで、待ち合わせの広場に向かつたわけだが、

誰もいませんでした。

代わりに素敵なメールが一件。

~~~~~

今日は一時間待っても会えなくて残念だけ、
次は会える事を信じて楽しみにしてるから。

あ、ちなみに今「32だから。

脅かそうとして、間違つて安全圏外で攻撃しても怒らないでくれよ
(笑)

それじゃあ、バトル楽しみにしてるから。

~~~~~

もつ懸す気もないみたいですね、ハハハ……。

今日は徹夜でレベリングしようっと……。

《現在》

メイト

Lv18

?

バリーからの恐怖のPK予告メールから1週間が経つた。

正直、あそこまでレベル差があるとは思つてもみなかつた。  
Lv32つて、まだ10層も攻略してないんだぜ！？  
Lv200が上限つて言つてもいくら何でも…なあ？  
だからつてわけじやないんだが、この1週間、俺はレベリングに徹  
したわけだ。

その成果だが、フフフ…見よ…Lv24の輝きを…！

わざわざ8層まで行つて山籠りした甲斐があつたといつものだ。う  
んつ。

さて、1週間も情報を断つとすっかり浦島状態だ。

街に行つて見るか、うん。

食糧も空きたし、換金と武器修理もしなきゃな。

## 第8層 『マルロー』

山々が連なつて形成されたその層は飛行能力を持つMobが出現す  
る。

時では結構苦労させられたものだ。

まあ、強力スキルを携えたLV24の敵じゃなかつたがな、ハツハツハ！－！

おつと、いけない。話が逸れてしまった。

えーと……そうだ、街だ、そう、街。

こここの街は見つけるのに苦労させられた。何時間も歩き回ったのに見つからないぐらいだから、相当な苦労だ。

『さぞかし皆も苦労したんだろうな～。』とか思つたんだが…

スレッド見たら一発でした。

『第8層、街までのナビゲート』だつてさ。入口から街までのルートが懇切丁寧に書かれててまあスゴい！！  
出来れば数日前に知りたかったぜ、ブラザー！！  
あ、スレ主は女性か。まあいいや。

それと、どうやら第10層攻略だが手詰まりらしい。  
噂ではとんでもなく強いんだとか。

今までの比じゃないらしい。

『次国への門』だからと言うのが有力説だ。

この世界は十の国に分かれている。

計算通りなら今回が国と国を繋ぐ門、次の国への門、『次国への門』  
というわけだ。

なんにせよ、中堅プレイヤーの俺には縁遠い話だが。ん？バリーを

助けないのかだつて？

俺だつて助けてやりたいさ、そりやあな。親友なんだから。

でもな、これは『テスゲーム』だ。

死んだら終わり、即終了だ。

中途半端な力を付けたところで最前線には立てない、資格も無い。

だからこそのレベリングだ。

とりあえず、最低限の力は身に付けた。

次のステップに移ろうと思う。

“ボス戦の雰囲気に慣れる事”

ダンパさんに指摘されるまで全く気付かなかつたのだが、俺にはボス戦の経験が無い。

そこで、クエストの中ボス戦に挑む事にした。

“TGO”には“グランドクエスト”以外にも多数のクエストが存在する。

モンスターの採取、討伐、交換、etc.

その数は数え上げたらキリが無い程だ。そして、今回挑む中ボス討伐は、グランドクエストたる門番の討伐に次ぐ難易度と言われる上級クエストだ。

当然の如く、一人用クエストではない。

これは数少ないギルド用クエストなのだ。

ソロプレイヤーである俺は、“同志”を募らないといけない。

『信頼出来る仲間を見付けるのも強くなるつて事よ、どんな化け物

だつて一人じや限界がある。中堅プレイヤーなら尚更だ。』『  
のは、ダンパの言葉だ。

情報屋を営む傍ら、自らの命を守るために身に付けた両手斧捌きは  
攻略組顔負けだ。

出来る事なら彼にも手伝つてもらいたかったのだが、彼は『チヨ  
ツパチヨップス』という中堅プレイヤー内では名の知られたギルド  
のリーダーだ。

ギルドリーダーがギルドを脱退する事は出来ないため（仮に、ギル  
ドリーダーが脱退すると、ギルドそのものが消滅してしまつシステ  
ムだからだ。）自力でなんとかするしかない。

頼る宛などあるはずも無く、結局ダンパさんのアドバイス通り、酒  
場に行く事にした。

カラソカラソと扉に取り付けられた鈴の音が店内の喧騒に下記消さ  
れた。

ギルドメンバー募集欄があるって言つてたけど……アレか。

薄暗い店内で淡く輝くホログラム

ビックシリと書き込まれた募集要項や条件に目を通す。  
本の活字みたいで目が痛くなりそうだ。

「見ない顔だな、新入りか？」

中腰のまま振り返ると三人組の姿が目に入った。

先頭の、話しかけてきた男がどうやらギルドリーダーらしい。

頭上に表示されたプレイヤー名の横に王冠のマークがついている。こうした事は後ろの二人は彼のギルドのメンバーということだろうか、人懐っこさを感じさせる笑みを浮かべる青年と一人の陰からこすりを伺う眼鏡の少女も、自分と同年代だろう。

「前衛を探してるんだが、どうだ？」

願つても無いチャンスだ。

今すぐにでもOKしたいところだが、ここは勿体ぶった態度を見せるのが一番だ。ダンパ曰く『舐められたら負けだ、取り分も減らされちまう事だつて無いとは言い切れねえからよ！』との事。

「詳しく聞かせてもらおうか？」

ちょうど空いていた四人掛けテーブルに腰を下ろすと三人もそれに倣つた。

「自己紹介がまだだつたな、俺はバーク、こっちのがマイルで、リザだ。ま、上に表示されてんだけどな、」

笑顔の青年、眼鏡っ子を順に指した後、目線を真上に向ける。

「メイトだ、こちらこちらよろしく。」

『よろしく！』と、威勢の良いマイルの挨拶とは対照的にリザの挨拶は会釈だけに留まった。

「で、メイトは前衛なんだよな？何使ってるんだ？片手剣か？両手

剣？斧とか？

ズイツと顔を寄せる。

まるで少年のような、純粋な瞳。隣に座っている一人もジツと言葉を待っている。

「ツ…ツインダガ…。」

思わず口ごもる。

両手短剣は人気が無いというスレを思い出しての事だ。  
尻すぼみになってしまったため、『なんて？』と、首をかしげている。

「両手短剣、だけど。」

つまりながらも伝える。

きっと、『短剣は無えなあwww』と一緒に臥して去ってしまうだらう。

そう覚悟したのだが、

「ふーん、珍しいな。で、熟練度はどんなもん？マッチョーネート武器適正率はB以上だと

「待つた待つた、」

「なんだよ？まさか、適正率C以下なのか！？そりややめた方がいいぜ、メイト。適正率低いと武器の性能引き出しきれないないからな、」

「さうじやなくて…！」

ガタツ！…と音をたてて席を立つ。

驚いた様子で見上げる三つ顔。ポカーンといつ擬音がピッタリの表情だ。

「短剣だぞ！？スレで叩かれまくりの、短剣使いだぞ！？」

つい、声を張り上げてしまった。

内容も内容だ、自分の首を絞めるような真似までして

「そりなのか？じゃあ問題ねえよ、前衛なんだし。ってか、早く教えろよ～、この際熟練度だけでいいからや～？」

『やうだやうだ～！～』と後ろの一人も口をこんな風に尖らせ  
てブーブーと言い出した。

「本当に、いいのか？」

「良いって、そんだけのレベルに上げれるって事がメイトの強さの  
何よりの証だよ。それとも厭なのか…組むの…？」

「いやいや、全く…」

ブンブンと勢いよく首を横に振る。

「よひしく頬むよ、

それから四人で作戦会議を行つた。

今回は中ボス討伐、と言つても第一層の、だ。

当初の予定の第三層の中ボスは石像のようなM o bで、時代、見た目通りのあまりの堅さに十人がかりで一時間かかった事をメイトが進言すると、三人は手のひらを反したように意見を変えたのだ。

「だつて、ウチのギルド、ダメージディーラーいないし…。」

口数の少なかつたりザも警戒心を解いてくれたのか、徐々に発言するようになつた。

「そついえば、皆は何使つてるの?」

「銃! ! !」「杖…、「盾剣」

「杖か、リザは何魔法が使えるんだ?」

「支援系と回復系なら…、「

『かなりの腕前だぜ! ! !あ、攻撃系は水属性以外はサッパリだけどなwww』と、バーク。

なるほどな…。

追いかけっこを始めた二人を横目に情報を整理する。

彼らが扱う3つの武器は全て後方支援や壁用の武器だ。バフ  
タシク

ちなみに盾剣というのは片手剣と盾という事。

マイルは前衛だが、壁役でもあるため、中々攻撃に回れない。確かに、前衛が足りていない。

逆に言うと、強力な火力さえいれば、かなり上手く機能するはずだ。ダメージディーラー

「コレ、俺の武器適正と片手短剣の熟練度。<sup>マッシュチラー</sup>」

途端に、走り回っていた一人が駆け寄る。

「武器適正S！？初めてみたよー！」

マイルが田を見開いて驚いている。

「熟練度561って、お前…無茶苦茶だな、本当。」

「攻略組レベルだよね、完全に…。」

苦笑いするリザ、口元が引き攣つっている  
ひきつって

「時代から使ってるからね、適正にも加味されたのかも。熟練度は剣振つてれば上がるし。」

最初の1週間、牢獄に閉じ込められた俺はガムシャラに短剣を振るつていた。

その後も早朝は剣を振るようにしていたのだから、中堅プレイヤーとは一線を画しているのは当然といえば当然。

「これなら一層の中ボスなんて余裕だなー！」

「ああ、この層のネオ系の方が強いぐらいだよ。」  
強化型M〇〇

実際に対峙したわけではないが、攻略スレの情報から考えるとそういうやや正確さに欠けたものだが、しかし今は士気を高めるのが最優先事項だ。

「それじゃあ経費の方だけど、移動には転送装置を使うとして…、  
回復薬とMP回復薬の費用は折半で良いかな？」

マイルの申し出に一同は一様に頷いた。  
「ボスドロップのユニークアイテムは取ったモン勝ちだ。あとで揉めないようにな。」

ユニークアイテムはボスなどがドロップする装備アイテムで、他の入手方法が無いのが特徴だ。その効果は様々だが、高い性能を持つ。発言者であるバークが一同を見回したが、これに対しても舌を噛める者はいなかつた。

「それじゃあ、今から30分後に転送装置前に集合だ。それまでに各自準備を整えておくよーに。」

ゴホン、と咳払いをしつつ胸を張るバークを指差したリザが耳打ちする。

「本人はあれで威厳たっぷりのつもりなんだよ。」

『むしろ逆効果だよね?』といつ彼女の問い合わせに対して俺は曖昧に笑うしかなかつた。

武器耐久度も万全だ。

「現在」  
トロボゲートの設置されている中央広場までは五分もあれば着く。

「行くか。」

メイト  
LV24

?

## 第一層 『イゴーニア』

常に空が赤い事さえ除けば中々素晴らしい場所だ。

不思議な色彩の空に倣つたかのように鮮やかな朱に染まつた紅葉と時折吹く冷たい風が現実世界の秋を連想させる。

また、高所から見下ろすと本来ダンジョンたる森の中心部にある部分に街が鎮座しているのが解る。

街に一分された森は　　いや、“大きな林”と形容する方が適切かもしれない。それらは小さなダンジョンで、今回彼らが向かうのはより小さい方、街の東に位置するダンジョンだ。

一つの森に生息するMobsのレベルはほぼ同程度、若干東の方が高いぐらいだ。

しかし、決定的な違いはダンジョンの最奥部、所謂ボス部屋だ。西側は次の層に続く門を守る門番がいるため、他の部屋の三倍はあろうかという大きさであるのに対し、東側の中ボスが待ち構える部屋の大きさは通常の大きさと大差無い。

これは門番が複数のギルドを連結したレイドで挑む事を前提としている事、そして中ボスにはレイドでの挑戦不可というシステムに起因する。

デスマームと成り果てたTGOにおいて、会社側が設定した目安など全く当てにはならない。

『死者を一人も出さない』といつ暗黙の了解の下、導き出された安全マージンは

『階層の数字』 + 10 = 『プレイヤーレベル』

であり、中ボスに関しては階層 + 15、門番に挑むなら階層 + 20 のレベルが条件とさえ言われている。

メンバーが四人である事とパーティ構成、レベルを考慮すると、やはりこのダンジョン以外の選択肢は無いようだ。

俺としてはむしろ有り難い話だけだ。

“ボス戦の感覚を掴む”事が今回の目的であり、そのために連携プレイのいろはを学べる程度の余裕があるのは彼の望むところである。それに、

「それじゃあ、元気出して行こう!」  
「うひえ、いつして誰かと“ゲームをする”のって、久し  
ぶりだな……よし……」

「おこメイト、そんな急ぐなよ……」

「足元見てないとトラップに……」  
「うわッ……矢が飛んで来た!?」

「先が思いやられるわね……」

ポツリと溢れた不安はメイトの叫び声に轟き消された。

数分後、落ち着きを取り戻して一言。

「どうやら俺は」の森の神の逆鱗に触れてしまつたようだ。  
すまない…皆…。」

「一人ではしゃいで低級トラップにかかつてただけだろッ…。」

「メイト、ちよつとふざけ過ぎだよ?」

「うわあ…マイル、笑顔だけど青筋が…。」

「メイト、おバカさんなの?」

「「リザ…!」」

二人が彼女を叱りつけた。まるで『本当の事言つたら傷付くだろッ  
!…』と言わせているようだ。

しかし、不本意ではあるが非を認めるのが大人というもののここは  
頭を下げる事にしよう。

「いや、俺が悪かった。誰かとこうするのも久しづりだったからさ  
…。それでもちよつと浮かれ過ぎたよ、ゴメン。」

頬を搔きながら苦笑する。

「…(ボツ…!)」

「？」

何故か顔を赤らめている。眼鏡の奥の栗色の瞳が忙しなくキョロキョロと動いている。

「べ、別に解ればいいのー！……ほ、ほらっ、早く行くわよー！？」

「なあ、リザはなんで怒ってるんだ？」

先頭を歩き始めた彼女に聞かれないよう一人に訊ねてみたが、たた無言で肘で小突くだけだった。

奥に進むにつれてだんだんと薄暗くなっている。本来の空の色からしてこの視界の悪さは有り得ない。恐らく目的地に近付いている証拠だ。

「なあ、皆。」

「ん？」

油断なく視線を左右へ走らせたまま応答する。

「変だと思わねえか？」

「何が？」

「」  
「」

遭遇

よ、」

「……。」

「今にも集団で襲い掛かってくるんじゃねえかなー?なんて、

「

その瞬間、いくつかの変化がもたらされた。

一つ目は空、この層に於いては決して訪れるはずの無い、闇。

二つ目は重圧、前方から圧倒的な“何か”が見下ろしているのを四人は感じ取った。

三つ目、“死”の足音。

「後ろに飛べえええッ！！」

気付くと後方へと飛び退きながら大声で叫んでいた。

目の端で三人を捉える。全員間に合つたようだ。

数秒前まで彼らが立っていた場所には七本もの槍が突き刺さっていた。

まともに当たつていたらとすると背筋が凍る。

まさか レッドギルド!?

突如現れた七つの影は槍を引き抜くとこちらに近付いてくる。

はたして それらは人では無かつた。

今は見えない空の色と同じ赤い眼、前進黒い体毛で覆われたそれは  
獣人型M o b 『レッドブル』。大きく突き出た一本の角は猪のそ  
れに酷似している。

頭上に光るHPのバーの横にはモンスター名とレベルが表示されて  
いる。

平均でLV13。一見、大した事は無いように見える。が、しかし  
問題はそこでは無い。

「何でレッドブルには群れる習慣は無いはずじゃ…。」

そう。通常M o bは獣人型や亜人型などの人には群れを成す性質を持たない。

確かにレッドブルは獣人型にカテゴロリされるが、群れを成す性質は  
無い。

しかし、唯一の例外がある。

「まさか、ネオ<sup>強化型</sup>が…？」

「レッドブルのネオ！？聞いたこと無いぞ！？」

そう、レッドブルの強化型を見たという話は聞いた事が無い。

そもそも強化型の存在する固体の数は全体の三分の一にも満たない  
ため、存在するかどうか怪しいのだ。

だが、

「『ネオブル』……ツ…！」

上級アビリティ 『ファンтом』によつて 『索敵スキル』がMAXまで引き上げられた彼の目は、三メートルに迫る巨体の獣人モンスターが仁王立ちしている光景を映し出していた。

「リザ！…支援魔法をツ…！」  
「ヒンチャント

「解つて、ブレイブパワーツ…！」

既に杖を構えて魔方陣を待機させていた彼女が声を発すると、魔方陣が回転を始め、赤い光が四人を包み込む。筋力値ボーナスの魔法だ。

続いての魔法、“エアアーマー”はダメージを軽減する強化魔法。

単体強化であるため、全体強化魔法より効果が高い。

青いエフェクトが一瞬視界を過るのを確認すると、メイトは全力で駆け出した。

後方、入口の方へと。

「スマンツ…少し耐えてくれ…！」

「な、ななな、なつ…？」

三人が同時に口をパクパクし始めた。

『なんか金魚みたいwww』などと考へている場合では無い。

「信じろツ…！」

取り残していく三人にそれだけ告げると筋力にモノを言わせて大きく跳躍、飛ぶように木々の間を走る。

一刻でも早く戻りたいという気持ちを押さえ込みながら走り続ける。

仲間を助けたい。

だからこそ今は距離を取らなければならない。

相反する二つの思いを抱えながら、走る。

「クソツー！」

二丁拳銃が火を吐く。両弾頭部に命中、クリティカル判定。残りはレッドブル四体と未だ沈黙を守るネオブルの計五体。

前衛のマイルが槍で牽制している。

ここからでは見えないが、この瞬間は彼の顔に笑顔は無いだろう。回復魔法の魔方陣を待機させながら背後に意識を向ける。しかし、何かがやつて来る気配は感じられない。

「……あんなヤツを信じた私がバカだつた……ツー！」

強く唇を噛む。ピリツと痛みが奔る。

そうだ、忘れてはいけない。これは既に単なるお遊びでは無い、この痛みも、死も、現実なのだ。

知り合ったばかりの男とギルドを組む？

逃げ出した人間の都合の良い言い訳を信じじる？

間抜けな自分が厭になる。

「バイヒール！！」

全体回復魔法、縁のエフェクトが一陣の風のように吹き抜ける。HPバーのゲージがMAXまで引き戻される。同じく、横に立つバークもHPは満タンだ。

しかし前衛で支えるマイルのHPは七割弱、やはり、この数を一人で支えるのは厳しいようだ。ネオブルが一切の動作を見せないのも気になる。

「リザー！」

「え？」

頭上に、黒い点が、あつた。  
それはだんだんと大きくなつて 気付いた。あの点は一本の槍だ。

ネオブルが獰猛な笑みを浮かべていた。ゾッ！…と背中を冷たいモノが奔ると共に彼女は悟つた。

「ああ、死ぬんだ、私……。」

二人が必死に叫んでいるのが見える。

それなのに、彼女の耳には何も届かない。

人は死の直前、時間を実際の何倍にも体感すると聞いた事があるが本当らしい、<sup>死</sup>槍がゆっくりと近付いて来るのが見える。

この時リザは、死を悟った大半の人間と同じく不思議と穏やかな気分だった。

ゆっくりと目を閉じ、死が訪れるその瞬間を待つた。

お待たせ、

死が、彼女の肩を叩いたのだと直感した。  
優しい、男性の声。“ アイツ ” の声。

裏切られたのに、私つてばバカみたい……。

しかし　これが“死”というものなら、案外悪く無い。痛みも  
感じない。

意識だつてほら、こんなにもハッキリと　、

薄く瞼を開く。そこには、

呆然と立ち尽くす二人と、独りでに消滅していくレッドブルの姿があつた。

「何、これ……。」

ネオブルが暴れ出した。

木のような太い一本の腕をガムシャラに振り回している。

虫でも追い払うかのような動作、しかし背中から発する青白いエフ

エクトが確実にHPを削つていく。

何分間そうしていたのだろう。

ついに抵抗を止めたネオブルのHPバーは完全な白に染まっていた。パリンッ！！という硝子が割れるような音と共に無数のポリゴンの粒子へと変化するのを見届けると、地面にへたり込んだ。

状況が掴めないまま、今更思い出したように自らの頭上に輝くHPバーを見上げる。

一ドットも減つてはいない。

それどころかレベルが上がっている。

「どういう事……？」

ネオブルの大槍が迫るその時まではレベルアップの通知は無かつた。つまり、レベルが上がったのはそれ以降という事になる。

だが、それは有り得ない。

TGO内でプレイヤーが経験値を手に入れる方法は次の三つに限られる。

- ・Mobを倒す、または他プレイヤーが倒したMobにダメージを与えていた時
- ・特定のクエスト報酬
- ・ギルドメンバーがMobを倒した時

あの時点で、残りの四体は無傷だった。自分が経験値を獲得するには残りの二人がトドメをさす以外に方法はない。

「もしかして、メイト…？」

そう。あの攻撃の正体がメイトによるものならば説明がつく。  
ただ一点、問題があるとすればそれは当の本人の姿が見当たらない事だ。

弓矢やバークのような銃を使えば遠距離からの狙撃も可能だが、昼間見た彼の遠距離系の武器適正<sup>マッチマーク</sup>は決して高くは無かつた。  
アイテムを取り出すために開いたウインドウには半径300メートル圏内のプレイヤーとモビの情報が映し出されていたが、彼の反応は無かつたため、その可能性も低い。

それでもあの瞬間、確かに彼の声が聞こえたのだ。今でも耳から離れない、優しい声が。

「居るんでしょう？ねえ、」

応答はない。返つてくるのは風に揺られた木の葉の擦れる音だけ。

「 そっか、」

違つたんだ。

やつぱりアレは、貴方じゃないんだね、メイト……。

「 戻る。」

溢れ出しそうな涙を堪えて来た道を戻る。

嘘つきイ……！！

溢れ出す涙を拭う。

それでも止まらない涙が頬を、大地を濡らす。

「ごめんな、恐がらせて。

ポンポン、と誰かの手が頭を撫でた

気がした。

メイト　　！？

振り返る、しかし、そこには何も無い。

「リザーッ！－遅エゼーッ！－」

「　　ごめん、今行くーッ！」

走り出す瞬間、一瞬だけ　　いや、さつと氣のせいだ。

「　　今度会つたらただじゅおかないんだから…ッ－！」

誰にも聽こえない小さな一言を残して、駆け出した。

言つたか……。

三人が去つて行くのを見届けて、大きく息を吐いた。

結局また独りだが、昨日までと同じ。ただ戻つただけだ、彼らを救

えただけ良しとしよ'う。

先程の現象は勿論、怪奇現象やバグなどでは無い。彼の仕業だ。

アビリティ 『ファンтом』、敵味方問わず欺く“幻想”の力。

隠蔽スキルをMAXまで引き上げられた彼の姿を捉える方法はただ一つ、視認する事。

ネオブルが動かなかつたのは彼から視線を外さないため。

彼の持つ能力をどんな方法で察知したのかは解らないが、透明化を発動するための条件、“全員の目を逸らす”必要があつた。

どうあつても視線を逸らす気は無いらしいと判断した彼は一度、戦線を離脱する事を決断したのであり、決して逃げたわけではない。

と言つても、説明する必要もするつもりも無い。

自分のせいでの以上誰かを危険にさらしたくは無い。

このまま恨まれ役を買つた方がずっとマシだ。

「さて、それじゃあ中ボスでも見に行きますか、」

ギルド追放は加入から最低でも6時間は認可が降りない。つまり後三十分は余裕があるわけだ。

「あ～あ、四人で戦いたかったなあ～ッ！！」

数分後には切れるだろう支援魔法の赤と青の光。今にも消えそうな淡い光が、突然強さを取り戻した。

強化魔法の継続。つまり、“術者が再び魔法を発動した証”。

まるで『お見通しだよ?』と言わんばかりだ。

「ハハツ。ありがとう、リザ。」

そう独り言ちて、強く大地を蹴り上げる。  
森を駆け抜ける彼を包む一筋の光は、まるで誰かが寄り添っている  
かのようだった。

『現在』

メイト Lv25

?

「…………で、お前さんは憎まれ役を買って出たわけか。その三人を確実に守るために？」

「ここは第六層 『ツートン』、ゲーム攻略を目指す中堅を支える生産職プレイヤーの聖地<sup>メッカ</sup>…………と言つても、常駐しているわけでは無い。来週までには殆どの人々がここを去るはずだ。

今も、ダンパーのガラクタ…………もとい、雑貨店の隣でアクセサリーを売る女性プレイヤーが商売の合間を縫つてアイテムを纏めている。

「第一の国 か。」

このゲームは十の国から成る。

一つの国に十の層。

現在は第十層の攻略が行われている。

これまでのペースから、攻略には三日もあれば充分だと思われていたが、どうやら一筋縄ではいかないようだ、既に一週間が経つた。

「何でも、『あの八人』が協力するとかしないとか、つてのが専らの噂だ。」

“あの八人”というのが誰を示すのかは言わずもがな。

「んで、今日は何だ？まさか世間話に。つてえわけじゃねえだろ？」「

昼間だといつの間にアイテム欄から酒を取り出して、一気にあおった。

『体に悪い』なんて言い分は通じない。『仮想空間の飲酒がか？ハツ！』と、一蹴されてからは何も言わない事にしている。この人に口じや敵わない。

「ちょっと見てもういたいものがあつて。」

つい最近手に入れたアイテムを彼の前にそっと置いた。途端に田の色をえてじつくりと観察し始めた。

その鋭い瞳は飲んだくれの酔っ払いのモノでは無く、情報屋ダンパの顔だ。

「メイテ……」こいつを何処で……？」

「第一二層でね、ドロップ品だよ。」

「俺の記憶が正しけりゃあ……あそこの中ボスのドロップは毛皮の帽子だつたと思うが？筋力値 + 8 の。如何せん、見た目のせいで誰も使いやしねえって評判ですよ……裏で出回ってるぜ？」

「ああ、そっちじゃないんだ。これはネオブルのドロップだから。」

ピクッ、と彼の手が動きを止めた。なめ回すように見ていた彼はそつと緑のローブを置いてこちらを見つめた。

「ネオブルの、なのか？本当に……居たのかー？」

小声で迫る彼の田は真剣の色を帯びていた。

周りになるべく悟られないよう、まるでダンパーの店の品を漁つているかのように一番近くにあつた紫色の薬草を手に取る。

「大槍を持つてましたよ、投擲スキルも備えていましたし。」

「その情報買った、1000でどうだ?」

「ダンパさんにはお世話になりますし、いいですよお金は。」

「そうか、悪いな。」

「ウインドウから硬貨を引きました金をしました。」

『儲け儲け』と顔に書いてある。情報のレートはサッパリだが、かなりの高値で売買されるのだろう。

「その代わりに一つ、いいですか?」

『ツートンつてえと商売、商売つてえとツートンつうイメージだが、実はもう一つ、良い狩り場が多いのでも知られてる。情報通の間で、だけどな。それで、この地図の×印の場所がそれだ。お前工にやるよ、メイト。遠慮すんな、俺覚えたからな。』

「ソレを抜けた所か……。」

染みのついた紙切れをアイテム欄へ放り込む。

「これで1アイテム扱いかよ、納得いかないな……。」

後で地図にマッピングしたら処分するか

ん？そつだー！

メールを作成する。差し出し相手はリザ。

『今度会つたらただじゃ おかないからねつ！一覚悟しなさいよーー』

というラブコールを先日受け取ったばかりだ。

マイルとバークを説得してくれたのも彼女らしい。俺がお尋ね者になつていなければそのお陰だ。

そうでなければ今頃はスレッドで詳細な個人情報を晒されていたらはずだ。

お礼とお詫びを兼ねて、というわけだ。我ながらナイスアイディア

!!

早速俺は先日の謝罪を兼ねたメールに手紙を添付して送信した。

メールにアイテムを添付出来る。ただ、送れるアイテムには制限がある。

まず、装備品の類は送信不可である。どうやら質量があまりにも大きい物は無理らしい。他にも、<sup>レア</sup>希少度の高いアイテムも送る事が出来ない。

これについては『万が一、間違えて添付してしまったとしても大丈夫なように』という明確な理由が存在する。念には念を、という事か。

そんな事を考へていろいろに一つの間にか着いていたらしい。十名以上のプレイヤー達が時間を気にしながら並んでいる。

「最後尾つて」ヒで合つてますか？」

アフロとこうなんとも斬新な髪型の男性に声をかけた。

「ああ、そうだけど。でも大丈夫なのか？」

俺の腰 より正確には一本の短剣が鞘に納められているのを一警した。

この人もか。

ダンパがいつも恐がられている事にイライラしているのを見てきたわけだが、なるほど、確かにウンザリする。

「武器だけで実力は測れないと思うけどな。」

だから普段より挑戦的な口調になってしまった。

しかし、それが拙かつた。

「ほお、言つねえ〜？」

アフロの男はニヤニヤと挑発的な笑みを浮かべた。見れば彼のギルメンと思しきプレイヤー七名が周りを囲んでいる。

「なら、その実力を見せてもらおうか。なあ、お前らも見たいよなあ？」

アフロの男 ロッタが周りに同意を求めると言ふ一様に頷いてみせた。

「…………て、わけだ。お手並み拝見といいつか？」

「一対一で闘り合つか？」

一步、詰め寄る。

「いやいや、まさか

彼の言葉を大仰な仕草で一笑に伏した。

『…………はーつ、M○b狩りとこいづや。』

「……分かった。」

えらく無難なチョイスだ。先程の反応からしてもう少しハードなものだと思つたのだが…。

「よし、それじゃあルールだが：戦闘時やM○b遭遇時における妨害は禁止。」

『流石に死にたくはねえからな。』と、付け足した。

「勝利条件は何だ？」

『「コイツ、勝つつもりでいやがるぜ？」といつ安い挑発を軽く受け流して訊ねる。

「討伐数で決めるとなると不正が生じる可能性が出てくるからな、特定のM○bを先に狩った方の勝ち、って事でどうだ？証拠はドロ

「ドロップ品の提示、問題無いな？」

「そのドロップ品を既に所持していたら勝負にならな」と思つが？」

「そう言つたぜ、でも大丈夫だ。今回のターゲットは『』の  
ヌシ 『ガーゴイル』だからな。」

「ガーゴイルか…。」

悪魔の姿をしたM・o・bで、飛行能力と火属性魔法を使う。正直、一  
人では厳しい。尤も、一度引き受けたからには降りるつもりは毛頭  
無いが。

「勿論、俺らは持っちゃいない。ほら、これでどうだ？」

ストレージ  
アイテム欄を可視状態にして見せる。確かに、火属性魔法を強化する  
という物だったはずだ。『ガーゴイルの火』、そう、それがドロ  
ップ品の名前だ。

もう一度見直して見るが、やはり彼らのストレージ内には無いよう  
だ。  
あくまで公平に、と自らのストレージ内も見せようとしたが、『い  
い、いい、別に。ソロが持てるはずねえよ。』と捨て台詞を吐き  
捨てて行ってしまった。

馬鹿にされようが構わない。実力を見せ付けてやれば良いのだから

と、思ったが……やはり腹が立つ。

「絶対勝つてやる……ッ！」

この時、彼はかつて無い程に燃えていた。

そう、これがデスゲームである事も忘れてしまつ程に。

『現在』

メイト L v26

?

『ガーゴイル』がヌシと呼ばれるのにはいくつか理由が存在する。

一つ目はその強さ故である。素早い動きと鋭く伸びた爪、そして火属性魔法。

遠近どちらにも対応する万能型マルチタイプの上に飛行能力も持つとなれば一介のソロプレイヤーが討伐出来るかどうかも怪しい所だ。

二つ目は個体数だ。

この層においてガーゴイルが複数現れる事は無い。層全体で一体しかいないからだ。もしもガーゴイルが討伐された場合、半日後に再び湧出ボップするまでは遭遇する可能性は無い。

現在、ガーゴイルが発見されたのはこの第6層のみ。まさしく、唯一ヌシの存在と呼ぶに相応しい存在なのだ。

他にも理由があるのだが、キリが無いので割愛する。

「フム……。」

今回は一対多の不平等極まりない勝負だ。

アフロ男の提示したルールに参加人数に関する制限や取り決めが無かつた事からも容易に想像出来るし、仮にこちらが認めなかつたとしても相手はルールを犯して複数人で挑む事は火を見るより明らかというものだ。

『むしろガーゴイルに一人で挑む方がどうかしてるよな、』と自嘲気味に苦笑し、不意に歩みを止める。  
無論怖じ氣づいたわけではない。

「ここの辺りだな……。」

攻略スレから数少ないガーネイルとの遭遇情報を集計し、導き出した場所だ。

ただし、虚偽の情報も混在しているため信用性にやや欠けるのが不安材料ではあるが。

しかし他に頼るものが無いのだから信じるより他無い。

「<sup>M o b</sup>ヌシの方に探させる、か。」

『何だかあべこべだな。』と思いつつも空を見上げて待つ準備は万端である。

因みに今回は遭遇する事が目的なので当然“透明化”は封印している。

「動いた方が見つかり易いかな?」

ぐるぐると周辺を動き回る事にした。

ただ待つだけって、案外疲れるのな……。

遅刻魔メイトは生を受けて十六年目、ついにその事実を知った。

「まだか…。」

ウインドウを開いて時間を確認し、愕然とする。なんとまだ三十分も経っていない。一時間は待つたと想つたのだが…。

「せめて姿さえ見えりゃあな…。」

アビリティ 『ファントム』によつて極限まで高められた索敵スキルで追うこと也不可能なのがそれも今は使えない。

捜しに行こうかな？

既に歩き回のも止め、腰を下ろしながらボンヤリと考えていた時だった。

地震？

微かだが確実に揺れている。  
そしてなにより、長い。心なしか時をおひおひ毎に揺れも強さを増していく気がする。

「随分と長い地震だな って、」

「…、ゲームの中だぞ！？」

気付くが早いか弾かれたように立ち上がる。

「 『ファンタム』 ツ…！」

体を冷たい何かが覆つ感覺を確かめながら周囲に目を奔らせる。

石や木のようなオブジェクトとは違い、フィールドに干渉するためには莫大な力<sup>エネルギー</sup>が必要だ。

それこそ何十という郡勢が走り回るほどの力が

はたして、近くにあつた木によじ登ると“それ”が目に飛び込んで来た。

いや、“それら”的間違いか、

先程まで居た集団がM・o・bの大群に追われていた。先頭を走るアフロ男の必死な表情からして突然の出来事だったのだろう、現在進行形で爆走中の彼らを見下ろして一言。

ヤベH、ウケる（笑）

いや、助けるよ？助けるけど…もう少し楽しんでからでも間に合つみたいだし、な？

とは思いつつも、腰の短剣を引き抜いて身構える。走る敵を背後から攻撃するのは困難だ。狙うなら　　頭部

M・o・bの最前列が差し掛かつたところで飛び降りる。振り上げた短剣を爬虫類型M・o・b『リザードナイト』の見た目よりも硬質な頭部を両断する。

それには目もくれず続けざまに一撃、呆気なくポリゴンの塊となる。割合高度なAIを持つているのか、異変に気付き混乱を引き起した。

まさか、知能が仇になるなんてな。

統制と勢いを失つたそれらを総て倒すのに長くはかからなかつた。

さて、先程の騒動で既に競争相手が消えてしまい、続ける意味も無くなつてしまつた。

が、続行。

ここまで待つて帰れるかッ！！

この時彼は意固地になつていた。利益やリスクの事など頭から吹っ飛んでしまう程に。

『現在』

メイト Lv26

?

## 第10層 《ウォーラ》

安息の地である街の広さは第1層 《トータス》 のそれとは比べるべくも無いような、そんな場所。

それとは対照的に街からずっと北へ行くと一際大きな門が見える。第11層 つまりは“第一の国”への扉という意味合いも込めて、この今回の攻略も、今までと同じようにすぐに入れるものと高をくくっていたのだが。

「今日で十日目か、」

寝ぼけ眼で時間と日付を確認して嘆息する。

十日、それが彼の所属する攻略組ギルド 《白光》 が足踏みしている日数。それは今までの異常なまでの攻略スピードからするとあまりにも長い時間といえる。

「今日こそ終わらせてやる

その言葉を現実のモノとするべくあの条件で手を打つたのだ、失敗など許されない。

“ もう一つの攻略組ギルド 《黒月》<sup>くろつき</sup> との共同戦線、それもボスドロップ品をこちらが入手した場合は無条件で譲渡する” などとこうふざけた条件を飲んだのだから。

「 何にしてもあの化け物を倒すのが先だけどな、」

ギシギシと顔をたてて、古い木製ベッドから起き上がる。

「　　の前に腹<sup>ハ</sup>いしらえか。」

身支度を整えると、空腹を訴える腹を擦りながら畳の待つ広間へと向かった。

「おー、バリー、おはよー。」「早くしないと全部食つちまうぞ～？」「ここ座れよ、ほら。「ちよつとも～、バリたんは私の隣に座るんだからあ！～ね、そりだよね！？」

朝から騒々しい彼らこそが俺の所属するギルド　『白光』のメンバード。

と言つても普段はそれぞれが別行動を取つている。

『白光』はここに集う人がそれぞれに独立、旗揚げしたギルドを連<sup>レ</sup>結した時の呼称であり、同時に実質のノン・ノンを任せている彼らは目の前のパンケーキを夢中で食つてゐる　のギルドの名である。

「おはよひゞやじこめす、皆さん。」

柔らかく微笑むと、黄色い声が上がる。声の主はレイナ。今日もフリフリのドレスのような服装、基調となる色は必ず白であるのも特徴だ。

その華奢な身体からは想像もつかないような馬鹿<sup>テ</sup>カイ銃器を扱う。

かなりの筋力値を要求されるであろうそれを片手で平然と振り回しているのを始めの頃は啞然として見ていたものだつた。

俺は彼女の隣へ座ると「コップにミルクを注ぎ、大皿に盛られたサンドイツチを適当に選んで口に運ぶ。

鳥型M○b 『ドードー』の卵と

「この肉は……？」

豚肉のようだが、シャキシャキとした不思議な食感はレタスのそれと似ていて。

「『モス』の肉だ。」

「ジャイロックさん。」

深みのある声と共に厨房から現れた筋骨隆々の大男。

これで盾と剣を持たせれば立派な戦士の出来上がり、といったところだが、彼の手には脱いだばかりであろう白い帽子が収まっていた。食事係を務めている彼の料理の腕前はプロ顔負けで、『料理スキル』の熟練度は早くも800に差しかかるほどだ。

本人は何も語ろうとはしないが、恐らく現實の方でも料理人だったのではないかと考えている。というのもそれを臭わせる発言が時折彼の口から漏れるからだ。

「『モス』の肉ですか？」

確かに、豚の背中に草が生えたような姿だつたか。

肉料理は火を扱うため料理スキルを最低でも500を必要とするため現在のところ一握りの料理人のみが扱える代物ということになる。

バリーが初めて口にしたとしても何ら不思議な事では無い。

「何だか野菜で巻いた肉を食べてるみたいでとても美味しいです。」

皆も頷いている。

表情には一切の変化は見られないが、やはり嬉しかったようでサン  
ドイツチを指差し、言った。

「モスの肉で作った、モスバーガーだ。」

「いや、アウトでしょう！？」

いち早く突っ込んだレイナの方へ向き直る。

「……何か問題でも？」

「問題大アリ」

「フム……スレッドには“モス食いてーツ！－”といつ熱い声が多  
数挙がっていたのだが…。」

本気で考え込み出した彼に皆苦笑を浮かべた。

朝食を採り終えると全員自室へと戻り、各自武器の最終点検とギル  
ドメンバーの召集に取り掛かる。

朝食前に点検を終えたバリーは回復アイテムの確認を済ませると、一足先に集合場所である街の大広場へと向かう事にした。

数日前まで彼らが独占していたこの街にも頭一つ抜け出した“攻略組予備軍ギルド”や次層開放を待つ生産職プレイヤーが現れ始めている。

自分としては戦力が増えて良い兆候だと思っているが、裏を返せば『攻略がかなり停滞している事の証拠』でもある。

焦りが無い、と言えば嘘になる。

恐らくそれは他のメンバーも同じだ。それでも無ければあんな条件を飲むはずがない。

「 つと、」

いつの間にか広場に着いていたようだ。

既に中央はフード付きの黒いコートの集団、《黒月》のメンバーで埋め尽くされている。

「おー、アンタ。」

不意に呼び止められる。一人組の男、一人は闇取のような凶漢、もう一人は鼠のような男だ。

「……何か?」

「アンタ“白”の方だよな?」

「『白光』のメンバー、という意味ならその通りだが?」

「ううかい、アンタもねえ…。なあ、お前はどう思つよ?」

鼠男が訊ねると、そこまで口を閉ざしていた巨漢の方が若干の間を置いて短く告げた。

「テスト、必要。」

『テスト?』と訊き返す前に鼠男が曲刀を鞘から引き抜いて突き付けた。

「3分、耐え抜いたら合格だ。」

それ以上の説明をする気は無いらしい。『決闘の申し込みです。』というメッセージが目線のやや下で表示される。

準備運動の手間が省けたな。

躊躇つこと無く“承諾”を押す。

“FIGHT!!”の文字が上空で大きく展開されると同時に、鼠男は地面を蹴つて突っ込んで来た。

中々の敏捷力だな。

降り下ろされる曲刀の太刀筋を見極めて回避する。

「課題は筋力値だな。」

鼠男の右手の甲を手刀で一閃。

手を離れた曲刀が宙を舞つ。

「なッ！？」

刀が地面を転がる硬質な音が広場中に響き渡る。

「まだ時間あるけど、続ける？」

曲刀を拾い上げて、ニッコリと微笑む。

「い、いえッ！？」

『すみませんでしたあッ！』と何度も頭を下げるが、差し出された曲刀をひったくるようにして猛スピードで走って行ってしまった。巨漢の男が巨体を揺らして追いかける姿を見送っていると、依然として固まつたままのギャラリーの中から拍手の音と共に聞き覚えのある声が。

「また腕を上げたな、『白騎士バリー』」

見れば、女性プレイヤーだ。

艶やかな黒髪と病的なまでに白い肌、彫刻作品であるかのような完璧なプロポーションに美しい顔立ち。しかし、目が放つ光は強者のそれだ。

「スレイルさんこそ、いつの間に隠蔽スキルなんて上げてたんですか？」

『なあ、白騎士ってあの白騎士だよな……？』『それにスレイルさんが出てくるなんて……。』

さわづき始めたギャラリーを一瞥するとスレイルは『付いてきたまえ』とだけ言つと黒いコードをはためかせながらターンして群衆の方へと歩き出す。

すると、波が退いていくように道を開ける。モーセの十戒の“紅海の奇蹟”を思い出しながら彼の後を追つた。

簡易テントの中へと通されたバリーは見た目よりも中の空間が広い事に気が付いた。

「腕の良い職人が居てね、知り合いで話をしてもらつて作つて貰つた。オーダーメイド品だよ。」

ソファーに身体を埋めて足を組む。

「羨ましい限りですね。ウチなんか毎日経理がヒーロー語りでますよ。」

溜め息をついてみせると彼はハツハツハ……と一頬り笑つた後、尚も吹き出さんとする笑いを噛み殺して言つた。

「経費の見直しをお薦めするよ、基本は人件費だね。いや、今田の結果によつては見直す必要も無くなるわけだが」

「やつですね ですがそれは期待出来そうにありませんよ、」

「まつ？」

鋭い眼光を放つ切れ長の目の端が僅かに動いた。

「あれだけ手を妬いでいる敵に脱落者を出す事無く勝てるとは  
う言ひ事かな？」

「少なくとも我が陣営からは、ですが。」

互いに睨み合う。が、フレイルは『くだらない』とでも言つかのよ  
うに鼻を鳴らした。

「先だけにならない事を祈るよ、バリー君」

「そちらも、妨害だけは控えて戴くよ!」

売り言葉に買い言葉。二人の間に火花が散り、我慢の限界に達しよ  
うとしていたその時、低い角笛の音が両者の間に割つて入った。

「決着を着けるのは後回しのようだ。　命拾いしたな、白騎士。」

「やぢらじや、ボスにやられて殉職。なんて事の無いよう!」

「ぬかせ。」

バリーの応酬を一笑に臥すと、テントを出る間際に捨て台詞を残し  
た。

「ならば勝負だ。このボス戦、ヤツの息の根を止めた者の勝利。報

醜は「」のプライド、異存は無いな？」

「受けたちますよ。」

一瞬の逡巡も見せる事無く言い放つと、彼女は挑戦的な笑みを浮かべたのみで、それ以上は何も言わず、外へと向かった。

割れんばかりの声援と拍手を受ける彼女を見据えて一步、踏み出した。

《現在》

バリー L V 37

?

第十層のファイールドを突き進む集団、攻略組プレイヤー達の行列は少なく見積もつても70人、いや80人はいるだろうか。そんな大名行列の中盤辺り。ちょうど白軍と黒軍の境目に位置するそこにバリー達はいた。

「ええ、言ひてやりましたよ。『我が陣営からは死者を出す事は無い』と。」

言い終えるや否や、反応は綺麗に一つに割れた。  
ジャイロニックやレイナを始めとする、称賛の拍手や言葉をかける者。もう一方は溜め息を漏らしたり、無言で首を横に振ったり。といったように言葉にはしないが、非難の色を示す者。

例えば目の前で肩を落として少し頃垂れるこの男もそうだ。

「なんで君達はそう……いつもいつも角突き合わせて……ハア。」

もやし体型が輪をかけて痩せて いや、やつれて見える。本当に氣苦労が絶えない人だ。

「頼むから大事にするのだけは勘弁してよ……？」

「“白帝ガルバイン”ともあらう方が何を弱氣な、」

そつ。目の前の一見ひ弱そうな彼こそが 攻略組ギルド 《白光》のリーダーなのだ。 じつして自信無さげに肩をすくめる姿からはとてもそういうは見えないが。

「フレイルは怒ると本当に恐いんだから。」

昔の記憶を掘り返したのだから、長い溜め息をついた。

「知りますよ、嫌ってほどね。」

彼女との隔絶は何も今田に始まった事ではない。

「で、どうするんだ?」その勝負。」

『一応訊いておくけど』とでも付け足しそうな口ぶりだ。

「勿論引受けますよ 大丈夫ですよ、皆さんの命が最優先のは変わりませんから。」

だからこそ戦術面に最も影響が少ない勝負なのだろう。あれでいて彼女も案外仲間思いなのかも知れない。

「ハア……本当に頼みますよ?君に脱落されたら困るんですから……無茶はしないように……。」

如何せん、自分があまりにも強過ぎるためか他人の事となるとどうにも心配症な面がある。それが純粋な優しさからである事も理解しているのだが。

「リーダー。」

そろそろ誰かが言つてやらないとな。

「僕達の実力を見くびらないでください。」

「いや、そんな事は……でも、そう思われても仕方無いのかも、しれませんね……。」

自覚はあつたよつて、何度もかの溜め息を漏らすとともに頑垂れた。

少し厭な言い方かもしけないが、これで良いんだ。

そう自分に言い聞かせて、彼から視線を剥らした。

『総員戦闘用意一ツ！』

伝令と地を揺らす角笛の音が混ざつ合ひ。

「それでは…援護よろしくお願ひします。」

『まかせてバリたん』薄い胸を反らして馬鹿タレカイ銃をドン…！と地面に降ろすレイナ。

壁のジャイロックも既にボスドロップである青銅の盾 《コバルトバレル》を肩に引っ提げて待っている。

「やつぱりその格好の方が似合つてますよ（笑）」

「バリー、君の方こそ“甲冑を着させたらT-GO-1の男”ではないか。後は早いとこ馬を見つけて手懐けないとな？」

暫しの沈黙。そして、

「ハハハ！！……」これは一本取られました。」

頭を搔く仕草をいかにもわざとらしくすると、普段は真一文字に結ばれている口許を綻ばせた。

「緊張でガチガチになつてゐるかと思えば……どうやら余計な気遣いだつたようだな。」

「いえ、お陰で肩の力が取れました。」

そう答えた俺の顔を横目で見遣ると、「ゴツゴツした礫<sup>つぶて</sup>のよつた手で前方を指差し、

「そつか、それじゃあサクッとよろしく頼むぞ、『白騎士』！」

ジャイロックの言葉が終わるか終わらないかのうちに、50メートルはあるうかといつ鉄の大門と彼らの間に 僅か10メートル程に一陣の閃光が地を穿つ雷のように落とされ、収束し 形を成す。

「第一前衛隊 突撃いッ！…」

黒軍総指揮官、“黒后”フレイルの凛とした声が響き渡ると同時に、ついに敵の全貌が顕になる。

岩をも弾く硬い鱗、鉄をも引き裂く鋭い爪、無数の棘に覆われた尻尾は一本の前肢と同様、一撃必殺の威力を秘めている。灼熱の火炎ブレスを吐き出すその口に至つては言わずもがな。

そう、誰もが知る想像上の生物 《ドラゴン》

十層の門番の頭ボスマンスター

上に表示されたその名の下には一段に分かれたバー、すなわちこれまでのどの門番とは較べるべくも無い膨大なHPを持つ事を示している。

グルルルル…という唸り声と共に高温の蒸気を洩らすと同時に、純白の甲冑に身を包んだ“騎士”的足が地を抉りながら猛然と駆け出した。

「第一陣、スイッチ用意！…」<sup>交代</sup>「第三陣、負傷者が半数を超えました！」「ブレス来るぞッ！…壁《タンク》気張れよ…！」

戦闘開始から30分が経過した。

参加上限の100人で構成された大パーティーは苦戦しながらも少しづつ、しかし着実に目の前に立ちはだかる怪物のHPを削っていく。

残り50%、これならいけるッ…！

確かに一撃が馬鹿みたいに重いが、モーションとブレス攻撃の溜めが長いためなんとか一人の脱落者も出す事無くここまで順調に進んでいる。

さてと、それじゃあ行きますか。

「sole ability 《ダルタニア》」

バリ  
『現在』

L  
V  
3  
7

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7157y/>

---

Twin Genesis Online

2011年11月26日16時55分発行